

国立国語研究所学術情報リポジトリ

On Japanese concessives : Information types and units of processing

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 衣畑, 智秀, KINUHATA, Tomohide メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002137

日本語の「逆接」の接続助詞について

—— 情報の質と処理単位を軸に ——

衣畑 智秀

(大阪大学大学院生)

キーワード

「逆接」、知識、文脈、処理単位

要旨

日本語の「逆接」の研究においては、個々の形式がどのように対立しているかを捉えるための、理論的枠組みについての考察が十分ではなかった。本稿では、関連性理論を援用し、話し手の知識や対話における情報の処理についての理論的考察を行い、これを踏まえることで、ノニ、ケド、テモといった「逆接」の接続助詞が適切に記述できることを示した。一般に「逆接」では、何らかの含意関係が否定されていると言えるが、この含意関係が、ノニは、話し手の「知識」という特殊なものであり、ケド、テモは、「文脈」という発話解釈に一般的な情報である。主節の制約やニュアンスなどのノニの特殊性は、この否定される含意関係の特殊性から説明することができる。一方、ケドとテモは、「文脈」が否定される中で、前者が前件と後件がそれぞれ独立した情報として扱われているのに対し、後者は前件と後件が合わさって一つの情報として処理される、という対立を成している。

1. はじめに

日本語の伝統的な文法研究では、タラ、ナラなどの条件文や、ノデ、カラといった理由文をまとめて「順接」と呼び、「順接」に対立するものとして「逆接」という概念が立てられてきた。

(1)a. 順接 (条件文・理由文)

勉強し (たら／たので) 合格する。

b. 逆接

勉強し (ても／たけど／たのに) 合格しない。

順接を一種の含意関係と考えるならば、(1)のように、「逆接」とは何らかの含意関係の否定とすることができる(坂原 1985 参照)。これまでの研究史の中で、「逆接」の個々の形式の用法についてはある程度明らかになってきたが、「逆接」を捉える理論的枠組みについての考察が不十分であったため、なぜ個々の形式が存在し、どのような点で対立しているのかという点が未だ明らかになっていないとは言えない。本稿では、話し手の知識や対話における情報の処理についての理論的考察を行い、これを踏まえることで、ノニ、ケド、テモ¹のようないわゆる「逆接」の助詞が適切に記述できることを示す²。以下第2節では、いくつかの先行研究に触れて「逆接」を捉えるためにどのような理論が必要かを明確にし、第3節で、本稿のよって立つ理論的背景の考

察を行ったあと、第4節で、各形式の意味を記述し、第5節でまとめと今後の課題を述べる。

2. 先行研究

2.1. 前田(1995)

前田(1995)では、ノニ、テモ、ケドの3語の、前接語、現実との関係、ニュアンス、主節表現の制約などの違いについて観察し、3語の意味を次のように捉えている。

テモは、後件の帰結を引き起こす条件として、前件が唯一でないということを含意することによって、条件的関係を否定し、ノニは前件から予測される事態とは逆の事態を後件に述べて、直接、条件関係を否定する。またそれにより、予想が外れたことによる話者の意外感・驚きなども同時に表される。それらに対して、ケドモには、特別のニュアンスは加えられず、多くの場合は逆接的な二つの事態を接続するが、順接的な場合もある。(pp.504-505)

これらはそれぞれの助詞の特徴の一面を捉えているようでもあるが、これらがそれぞれの構文的特徴とどのように結びつくのかは分明ではない。たとえば、ノニは主節に意志・命令・推量・疑問などが来ず、事実的であることが観察されている。

(2)a. *雪が降るのにいらっしゃい。

b. *雪が降るのに出かけよう。(前田 1995:p.497)

しかし、その理由は先に引用したノニの意味とは別に「前件の動作と、予測が外れたこと、即ち後件がともに³事実として確定していること」(p.503)という特徴から説明されている。もちろんここで、前田(1995)は「予想が外れたこと」と「後件がともに事実として確定していること」を結びつけて考えたいのだろうということは想像できる。しかし、前田(1995)の記述では、「予想」が外れても後件が「事実」になるとは限らない。なぜなら前田(1995)は、ケド、テモ、ノニの3語全てを「予想されるある条件的関係が成立しなかったという逆接を表す時に用いられる」(p.504)と規定しているからである。つまりテモにしるケドにしる「予想が外れる」と言えば言えるわけで、そもそも「予想」とは何か、テモやケドの「予想」とノニの「予想」がどのように違うかが十分理論的に説明されなければ、3語の違いや現象は説明できないのである。

2.2. 丹羽(1998)

丹羽(1998)は、「逆接の接続助詞」と言われてきた語群を包括的に扱い、随所に優れた記述が見られる。丹羽(1998)は「逆接」を扱う枠組みとして、次のような分類を提示している((ア)も三つに下位分類しているが議論に直接関係しないため省略)。

(ア) 同一世界内における対立

(イ) 二つの世界における対立

(イ1) 現実と話者の心(思い・考え)との対立。

(イ2) 話者の心と現実との対立。

(イ3) 話者の一つの心ともう一つの心との対立。(pp.93-98)

丹羽(1998)によると、ケドやテモは(ア)(イ)のどの対立にも用いられるが、ノニは(ア)

は表すことはできず、(イ2)に限られているという。(イ2)は、先の前田(1995)でも観察されているように、ノニの後件が事実に限られるということを意味する。しかし、なぜノニは(イ2)に限られるのか。丹羽(1998)は、さらに、(イ)の「話者の心」を「推量希求」と呼び、「話者が推量・希求するというものにも、話者が自分の意見として考える場合と一般常識によって考える場合とがある」(p.106)とし、ノニは前者であるため、話者の「自分の意見」と矛盾するような意見が後件に述べられず、事実に限られるとしている。

丹羽(1998)の見解は、(イ)の「話者の心」を「話者が自分の意見として考える場合」と「一般常識によって考える場合」に分けている点で、単に「予想」とする前田(1995)よりも進んでいる。しかし、「話者が自分の意見として考える場合」(p.106)であっても、(イ3)を設定するならば、「話者の一つの思いと別の思いが対立」(p.97)しても良いようにも思われる。ここで我々は話者の「自分の意見」とは何か、「話者の心」とは何か、といったことを説明する理論的なモデルが求められているのである。

3. 理論的枠組み

3.1. 「知識」と「文脈」

我々は、日常を生きていくにあたって、世界について真であると考えられる情報や真であって欲しい情報をストックさせている⁴。これを「知識」と呼ぼう。ここには、人が真として持っている情報に加え、それらから演繹によって得られる情報も含まれる。

一方、我々は対話において、対話相手がどのような情報を持っており、どのような情報を持っていないかを見積りながら対話を行う。しかし、このような対話で扱う情報は、必ずしも話し手の「知識」とは一致しない。話し手の「知識」を全て聞き手が利用できるわけではないし、聞き手の持つ情報に対する見積もりは、時に話し手に、自身の「知識」と異なる情報を使用させるからである⁵。よって、話し手は真と考える「知識」と対話で扱う情報を別に管理している。

では、この対話で扱う情報は、聞き手の「知識」と考えることができるのだろうか⁶。Sperber and Wilson(1995)はできないと答える。なぜなら聞き手は、自身の「知識」でなくても、知覚や推論可能な情報であれば発話解釈に利用できるからである。

Sperber and Wilson(1995:p.43)による次のような例を考えてみよう。

(3) [メアリーとピーターは遠くに建物が認められる景色を見ている]

メアリー：あの教会の中に入ったことがあるわ。

この文を発話するとき、メアリーはピーターがその建物が気づいているかを考えていなくてもよい。たとえば、(3)を発するまで、ピーターはその建物が城であると思っていたかもしれない。しかしそうであっても、メアリーは、ピーターが要求されれば教会としてその建物を同定できるという自信さえあれば、ピーターの「知識」に関係なく(3)のような文を発することができるのである。

この例は、発話解釈に使われる情報は「知識」に限定されるものではなく、聞き手が補う情報ならば何でも利用可能であることを示している。関連性理論では、このような「知識」より

もより広く弱い情報を、「顕在的な(manifest)」情報と呼び、対話において利用される情報である「文脈」を、「聞き手にとって顕在的な情報」という心理的な観点から定義している⁷。

以上のように「文脈」は、発話を解釈するための一般的な情報である。よって、ある言語形式に何らかの情報が含意される場合、特別な制約がない限り、その情報には「文脈」というより広い概念を考えておく方がよい。たとえば、「太陽はまだ昇らない」と言った時、このマダという語は、「(そろそろ)太陽が昇る時間だ」という含意を持つ。これは話し手の「知識」である場合もあるが、「太陽はまだ昇らないだろう」と言えるように、話し手は「太陽が昇る時間でない」と思っている場合もある。また、聞き手の「知識」と考えられる場合もあるが、そう考えられない場合もある⁸。このように、「太陽が昇る時間だ」という情報が、話し手や聞き手の「知識」と考えられるかどうかというのは、その時その場の言語運用の問題であり、マダという言語形式に関しては、含意されている情報が、話し手もしくは聞き手の「知識」のように限定された情報ではなく、より広く一般的な「文脈」であると考えておくべきである。

一方、「知識」は「文脈」に比べて特殊であり、「知識」が含意として言語形式にコード化されていることはあまりない。ただ、二人の人間が対立する意見を主張している場合や、「知識」が否定されて意外に思う場合などは、「知識」があからさまに関与しているケースである⁹。前者は、メアリーとピーターが当の建物について教会か城か揉める場合であり、後者は、たとえばピーターが当の建物が城でないと分かって意外に思う場合である。一方、ピーターはたとえ建物を教会として同定できて、教会でないことが分かった場合に驚くということはない。教会であることは、発話を解釈するために「文脈」として仮に導出した情報であり、ピーターの「知識」ではないからである。

3.2. 処理単位

人が、ある発話に対しては注意を払い、別の発話に対しては注意を払わないといったことが起こるのはなぜか。関連性理論では、人が注意を払う発話は、その聞き手にとって関連性があるからだとされる。たとえば、ある発話がなされても、その発話の伝える情報がすでに聞き手の中に存在している旧情報であったり、あるいは新しくても、聞き手の持つ情報と全く関連がない場合、聞き手にとってその情報は処理する価値がない。一方、新情報が聞き手の既存の情報と関連がある場合、聞き手はその情報を処理する。関連性理論では、聞き手が持つ既存の情報（これを「文脈仮定」と呼ぶ）と新しい情報の関連性のあり方について、次の三つの場合があることを提案している。

- (4)a. 文脈含意の導出
- b. 文脈仮定の強化
- c. 文脈仮定の否定

具体的に、次の例を考えてみる（Carston 2002:p.193 の例を改変）。

- (5) ビルは最近、毎週末ニューヨークに行ってるよ。

聞き手は「よく遠くへ出かけているならそこに恋人が住んでいる」といった文脈仮定を利用し

て、(5)の発話から「ビルには（ニューヨークに住んでいる）恋人がいる」といった「文脈含意を導出」し、この発話を関連性のあるものと見なすことができる。また、聞き手がビルに恋人がいるだろうという弱い仮定がある場合、(5)の発話はこの「文脈仮定を強化」する（聞き手はビルに恋人がいることにより確信を持つ）証拠であるという点で関連性を持つ。逆に恋人がいないという仮定に対しては、(5)は「文脈仮定の否定」となる（聞き手はビルには恋人がいると考え直す）かもしれない。

ここで問題にしたいのは、このように新しい情報が既存の情報と合わさって処理される時、その新しい情報はどのような単位で、既存の情報との関連性を査定されるのか、という点である。この単位のことを Carston (2002) にならって「処理単位 (processing unit)」と呼ぼう。Carston (2002) は、(5)のような文が、not や if などの演算子の中に埋め込まれた場合、推意（文脈含意）を導出できないことを観察している（Carston 2002:p.193 の例を日本語で示す）。

(6)a. ビルは最近、毎週末ニューヨークへ行っていないよ。

b. もし、彼が毎週末ニューヨークへ行ってるなら、随分お金を使っているだろう。

(6a)の否定は、「ビルに恋人がいる」ことを否定しているという読みはなく、「毎週末ニューヨークへ行っている」ことを否定している¹⁰。また、(6b)も「もし恋人がいるなら」という意味には解釈できない。このことが示すのは、「ない」や「もし」という演算子は、表出命題のレベルで作用し、推意には作用しないということである。演算子の作用を受けていない推意だけが導出されることはもちろんない。

(5)や(6)から、(5)の文のように独立性の高い要素は新しい情報の処理単位となる一方、(6a)のような、否定の中にある文の構成要素や、(6b)のようなある種の従属節は、主文に対する付加的な要素であり、独立の処理単位とならないことが分かる。たとえば、聞き手がビルとその恋人の仲が良いということに弱い仮定を持っていた場合の、次のような発話を考えてみる。

(7)a. ビルが仲良くデートしているところをよく見るよ。

b. ビルが仲良くデートしているところはあまり見ないね。

(7a)のように言うことは、この聞き手の持つ文脈仮定を強化することになる（聞き手はビルとその恋人の仲が良いことをより確信する）だろう。この場合文脈仮定を強化しているのは、下線を引いた従属節か文全体かは、一見分かりにくいかもしれない。しかし、(7b)のように文全体では文脈仮定の否定となるかもしれないことを考えると、従属節だけで(4)のような文脈効果を実現していると考えるのは無理がある。文全体が処理単位となって、文脈仮定を強化したり否定したりしていると考えべきだろう。

4. 「逆接」を表す諸形式

4.1. 知識の否定と文脈の否定—ノニとケド・テモ—

3.1節で論じたように、特別な制約がない限り、ある言語形式が含意している情報は、発話解釈に一般的な「文脈」である。しかし、我々は日常において、しばしば「知識」が否定されることを経験する。たとえば先にも述べたように、ピーターが城だと思っていた建物が、なんらかの

証拠によって城ではないと分かった場合、ピーターは、意外感や違和感を感じるだろう。このようなことを何度も経験すれば、「知識」の否定が言語形式にコード化されるようになったとしても不思議ではない。特に日本語の場合、含意の否定には、通常の「文脈」の否定以外に、「知識」の否定がノニという言語形式として概念化されている（衣畑 2001 参照）。

ノニは従来、違和感・意外感、不満などのニュアンスが伴うとされてきた。この違和感や意外感といったニュアンスは、話し手の知識が否定されることと表裏一体の関係にある。衣畑 (2003:p.5) より違和感・意外感、不満の定義を引用しておく。

(8) 人が持っている、世界に対する知識が、遭遇する現実によって否定され、修正を強いられ、実現を断念させられることで生じる感情。

ノニの場合に否定される知識は、条件的な知識が基になっていることが多い。たとえば、人は、日常を生きていくにあたって、雪が降っているときには出かけないとか、待っているときには現れてほしいといった条件的な知識をストックさせている(= (9)イ)。また、このとき眼前で雪が降っていることを知覚すると、その個別的な知識(= (9)ロ)と、演繹による「父は出かけない」といった知識を得ている(= (9)ハ)。このような知識状態の時に、[父は出かけた]のような現実の事態に遭遇すると、その人はハやイの知識が否定され、違和感・意外感、不満を感じる。

- (9)a. イ 雪が降る → 出かけない
ロ 雪が降っている
ハ ∴ 父は出かけない [父は出かけた]
- b. イ 待つ → 現れてほしい
ロ 待っている
ハ ∴ 現れてほしい [現れない]

ノニ文は、話し手がこのような心的状態のとき発話される可能性がある¹¹。

- (10)a. 雪が降っているのに、父は出かけた。
b. 待っているのに、現れない。

繰り返すと、(10)のノニ文のポイントは、否定されている含意が話し手の「知識」であるという点である。ただ注意しておきたいのは、(10)のようなノニ文に「文脈」が関わらないと言っているのではないことである。(10)も聞き手に向けて話しているとすれば、その解釈に聞き手は「文脈」を推論しなければならない。ただし、推論されている「文脈」は、意外感を感じる話し手の知識状態に限られているのである。

これまでノニは、「逆接」の中でも、意外感や不満を伴うと言われてきたが、なぜそれらのニュアンスが伴うのかは明確でなかった。本稿の分析からは、これらのニュアンスはノニの意味の中心であると言えるだろう。この感情を概念化しているからこそ、ノニの前件と後件は対立しているのである。では、他の構文的特徴はどのように説明できるのか。

よく言われるように、ノニの後件には、意志、命令、推量などが述べられない。

- (11) ??雪が降っているのに、出かけ(よう/なさい/るだろう)。

何らかの事態を推測したり命令したりすることは、話し手の知識状態に基づいて行われること

である。しかし、ノニは「雪が降っている、出かけないだろう」といった知識を話し手が持っている時に発話されるので、その知識に基づいて「出かけよう、出かけるだろう」と考えることはできず、(11)は不適格になる。つまりこれは、自分の知識によって自分の知識が否定されることは通常ありえない、ということでもある。人の知識が否定されるのは、人の意見による時もないわけではなく、ノニ文も(12)のように言える。

(12) 甲：太郎は合格するだろう。

乙：え？あんなに遊んでたのに？

しかし、最も知識が否定されたと感じることのできるのは、知識に反する現実の事態に遭遇した場合であり、ノニの後件はこの現実の事態を反映して事実になるのである。

同じような説明が次の例にもできる。

(13)a. ??薬を飲んだのに治らなかったのは、{当然だ／自然だ／もっともだ}。

b. ??嫌いなことがあるのに、私は楽しいです。 (前田 1995:p.501)

(13a)「治らなかった」は知識を否定する意外な事態でなければならないため、それを「当然」「自然」と見なすことはできない。また(13b)「私は楽しいです」のような話し手自身のことは、話し手が良く分かっているはずなので、話し手の知識を否定する事態としては通常奇妙である(但し、自身のことでも理解できないというニュアンスがあると、幾分自然になる)。

ノニは話し手の違和感・意外感、不満という感情を概念化している、という主張を最も端的に表すのは、次のような、遭遇した事態に対する話し手の態度を表す用法の存在である。

(14)a. (父親が出かけたことを聞いて) 雪が降っているのに。

b. (知人が現れないときに) 待っているのに。

先に、ノニの後件には意志、命令、推量が見れないことを見たが、前件と逆接的な関係でなければ次のように言うことができる。

(15) 雪が降っているのに出かけ(るな／ないだろう)。

たとえば(15)の命令は、話し手の知識と矛盾しない。衣畑(2001, 2003)ではこれらを、話し手の態度を表すノニ文と、同じく態度を表す命令文があたかも一文のように述べられたものと分析したが、このような逆接的な関係に拘らず話し手の態度を表せるところも、ノニ文が違和感・意外感、不満(=話し手の知識の否定)を概念化している証拠となるだろう。

これに対し、テモやケドによって含意されている情報は「文脈」であると考えられる。「文脈」は、「知識」よりも広く、発話解釈に一般的な情報なので、テモやケドで否定されている含意が「文脈」であることは、それが特定の「知識」に限らないことを論じることで示すことができる。

まず、テモ・ケドで否定されている含意が、話し手の知識でないことは、ノニと異なり、次のように後件に意志・命令・推量が述べられることから直接示される。

(16) 雪が降って(ても／るけど)、出かけ(よう／なさい／るだろう)。

(16)の例は自然であり、話し手が「出かけよう、出かけるだろう」と考えているときに発話されている。よって、否定されている「出かけない」という含意は話し手の知識ではありえない。また、(17)の例も、(13)とは異なり自然であり、否定されている含意が話し手の知識ではないこ

とを示している。

(17)a. 薬を飲んでも治らなかったのは、{当然だ／自然だ／もっともだ}。¹²

b. 嫌いなことがあ(っても／るけど)、私は楽しいです。

一方、(16)や(17)の例は、聞き手の知識を否定していると解釈することが可能である。しかし、必ずしもテモ・ケドで否定されている含意が聞き手の知識になるわけではない。たとえば(18)では、話し手は聞き手が「ツチノコを捕まえた、ツチノコを逃がさない」といった情報を真と見なしていると思っ(て)ているわけではない(これらでは話し手でさえその情報を疑っている)。聞き手は発話解釈のために、そのような情報が仮にでも補えさえすればよいのである¹³。

(18)a. あのおじいさんは、ツチノコを捕まえたらしいけど、逃がしたそうです。

b. たとえツチノコを捕まえても逃がすだろう。

このように、テモやケドで否定されている含意は、話し手や聞き手の「知識」のように限定されたものではなく、より広い「文脈」としなければ規定できない。注意されたいのは、ここでは、ある特定の文の解釈ではなく、何が言語形式にコード化されているかを問題にしているということである。テモ・ケドは、話し手の知識の否定が言語形式にコード化されているわけではないので、遭遇した事態に対する話し手の態度を表す用法があるとしてもきわめて状況に依存したものでしかなく、普通は次のように不自然になる¹⁴。

(19)a. ?? (父親が出かけたことを聞いて) 雪が降っ(て)い(ても／るけど)。

b. ?? (知人が現れないときに) 待っ(て)い(ても／るけど)。

c. ?? 雪が降っ(て)い(ても／るけど) 出か(け) (るな／ないだろう)。

4.2. 情報の処理単位—ケドとテモ—

4.2.1. テモの意味—Fujii (1989), 藤井(2002)—

従来、テモについては「逆接」の「仮定条件」を表すとされることが多かった。しかし、「勉強しても合格しなかった」という文の解釈からも分かるように、必ずしもテモは仮定的な用法に限られず、「仮定条件」「確定条件」(あるいは「恒常条件」)をともに表すとも言われてきた。これに対し、Fujii(1989)、藤井(2002)は、英語の even if との対比という新しい観点から、テモの意味の広がりについて興味深い研究を行っている(以下藤井 2002 を基に述べる)。

藤井(2002:p.253, 256)からテモの例を一部列挙する。

(20)a. 一生懸命勉強しても、試験に合格しないだろう。

b. 盆と正月がいっしょにきてもこの店を閉めるわけにはいかない。

c. サンフランシスコに行ってもケーブルカーに乗らない方がいいですよ。

d. ここで待っていてもバスは来ませんよ。

e. お化粧しなくてもどうせ同じなんだから…。

f. うちのボスは腹がすわっているから何があっても動じない。

g. 待っても待っても小野さんはとうとう現われなかった。

藤井(2002)によれば、(20)の中で、even if に置き換えられるのは、a, b だけである。a と b

は、A「スケール含意の極点指示」、B「逆説性」、C「非条件性」(p.257)という三つの性質を持つという。Aは前件「一生懸命勉強する」が「試験に合格する」スケールの中で、最良の条件であるということ、Bは前件と後件が含意関係の否定となっていること、Cは、前件の条件に関係なく（「一生懸命勉強する」「少し勉強する」「勉強しない」などどんな条件でも）後件の帰結（「試験に合格しない」）になることを意味する。

次にc, dは、この三つの性質のうち、Bだけを持っている。例えばdは、「ここで待っていてもバスは来ませんよ。あちらでお待ちにならないと。」(p.266)と言えるように、「ここで待つ」ことが「バスが来る」最良の条件とは言えない。また、「あちらで待つ」とバスが来るのだから、後件の帰結に必ずなるとも言えない。この例は藤井(2002)で述べられているように、話し手が、「聞き手が「バスが来る」ことを期待しているからこそ、そのバス停で待っているであろうという憶測」(p.266)をし、「聞き手の期待」(p.267)を否定するためにテモを使用しているのである。このようなテモは、英語のeven ifでパラフレーズできず、ifで訳さなければならない。ここでの論点は、日本語のテモは英語と違い、Bの性質がAやCと独立に概念化されているということである。

最後に、e～gは、Aの性質を持たず、前件の「選択並列」、「不定」、「反復」(藤井:p.271,272)によってCの性質を持つもので、「テモ亜形構文」(同:p.271)と呼ばれている。

藤井(2002)の研究の優れている点は、テモを「仮定条件」や「確定条件」などと離散的に分類するのではなく、それぞれの用法の拡張を動機付けられる点にある。テモは「テ形+モ」の形式に分析できるが、a, bとe～gは、構成要素である助詞モのEVENの意味とALSOの意味にそれぞれ対応させて理解することができる¹⁵。またc, dも、英語のeven ifが使えないことから、並列のモからの拡張と捉えられるだろう。藤井(2002)ではその過程が述べられていないが、次のようなものと考えられる。「ここで待っても、あそこで待ってもバスが来る」のような並列のテモ文は、ALSOのモからの派生である。これは、条件文「ここで待てばバスが来る」の誘導推論「ここで待たなければバスが来ない」を否定した意味（「あそこで待っても（＝ここで待たなくても）バスが来る」）にもなる。ここから並列の意味がなくなると、Bの性質だけが残る¹⁶。

さて、AやCは、ノニやケドにはない性質であり、テモの特異な領域と思われる。しかし、c, dのような、AもCもなく、Bの性質（いわゆる「逆接」的な意味）だけのものがテモにあるとすれば、それは、ノニやケドとどのように異なるのだろうか。答えの一部は既に出ている。ノニは話し手の「知識」が否定されているのに対し、テモは「文脈」が否定されているというものである。次にケドとの違いを論じる。

4.2.2. ケドとテモ

Blakemore(1987)は、英語のbutを、前件から文脈含意を導出するように制約を課し、後件の命題（もしくはその含意）が、その否定(denial)として関連性を有していることを示すと分析している。たとえば(21)の前件からは‘John is not honest’という文脈含意が導出され、後件の命題はそれを否定している。

(21) John is a Republican, but he's honest. (p.125)

(22)の場合、前件から 'We shouldn't seek John's opinion' という文脈含意が導出されるが、これを否定しているのは、後件命題が文脈と合わさって生まれる 'We should seek John's opinion' という文脈含意である。

(22) [A and B are discussing the economic situation and decide that they should consult a specialist in economics]

A: John is an economist.

B: John is not an economist, but he is a businessman. (p.129)

同様の分析がケドにも当てはまる。

(23) a. 太郎は共和党员だけど、正直者だ。

b. 甲：太郎は経済学者だ。

乙：太郎は経済学者ではないけど、ビジネスマンだ。

以上の分析で注目したいのは、but やケドは、前件だけで「文脈含意の導出」という文脈効果を実現していることであり、後件も後件だけでその導出された「文脈仮定（文脈含意）を否定」しているという点である。つまり、ケドの前件、後件はそれぞれの独立性が高く、個別の処理単位として機能している。

ケドの前件、後件が独立の単位として処理されるのを示す現象として、まず、ケドは前件だけで(4)に挙げたような文脈効果を実現することができる。(23b)の前件は、「太郎に相談すべきだ」という文脈含意を導出する以外に、「太郎は経済学者だ」という「文脈仮定を否定」することができる。次に、前件が「文脈仮定を強化」する例を挙げる。

(24) 甲：山田君は将棋が強いですよ。

乙：たしかによく将棋を指しているけど、勝ったところは見たことはありません。

「たしかに」という副詞に注目しよう。この副詞は、「よく将棋を指している」というケドの前件が、それだけで「山田君が将棋が強い」という文脈仮定を強化していることを表している。また、ケドの前件はそれだけで質問への返答となる。

(25) 甲：今、雨は降ってますか？

乙：雨はやんだけど、随分濡れてしまいました。

質問に対する返答は、通常一文ずつで行われ、独立の処理単位となる¹⁷。

このように、ケドの前件は、それ単独で、それ以前の文（脈仮定）に対して、「否定」、「強化」、「返答」、あるいは含意の導出として機能する。これは、ケドの前件は前件だけで処理されることを示している。一方テモは、(26)のように、前件単独でこのような機能を持つことはできない。

(26) a. 甲：太郎は経済学者だ。

??乙：太郎は経済学者でなくても、ビジネスマンだ。

b. 甲：山田君は将棋が強いですよ。

??乙：たしかによく将棋を指していても、勝ったところは見たことはありません。

c. 甲：今、雨は降ってますか？

??乙：雨はやんでも、随分濡れてしまいました。

たとえば(26b)の副詞「たしかに」は「よく将棋を指している」に係るようには解釈できず、「勝ったところは見たことがない」に係る。しかし、これは甲の発話への同意ではないため不適格になる。また、(26c)も(25)に比べ、質問に答えていないというニュアンスが強いため、やや不自然である。これは、テモがケドとは異なり、前件が後件に従属することで単一の処理単位として処理されているからである。

以上は、ケドの前件が後件と独立に処理単位となることを見た。一方、ケドの前件が、後件に従属して一つの処理単位の一部とはならないことを示す現象としては、ケドは、一般的に条件節や連体節の中に入りにくいことが挙げられる。これらの節は、3.2節で見たように、文を構成する付加的な部分なので、独立した処理単位が現れにくいのである。

(27)a. 毎週末ニューヨークへ行(??くけど／っても) お金が減らないなら、彼は随分金持ちなのだろう。

b. コチカラ呼バナ(??イケド／クテモ), 来テクレタ近所ノ人タチ

(南 1993:p.98 の例を若干改変)

また、(20d)のような文はケドに直すと不適格になる。

(28) ??ここで待っているけどバスは来ませんよ。

「ここで待っている」ことは聞き手にとって自明(旧情報)であり、それ単独では関連性がない。ケドの前件は、独立の処理単位として関連性がなければならないので、(28)は不適格になる。一方、「ここで待ってもバスは来ない」と一つの処理単位として述べれば、全体で「ここで待てばバスは来る」という「文脈仮定を否定」し、関連性のある文となることができる¹⁸。

4.2.3. 古代日本語

ケドとテモが、情報の処理単位により形式が分化しているということをより鮮明にするために、対照的な視点を導入する。

古代語では、現代語のケドにあたるド(モ)と、テモにあたるトモが対立していた。しかし、その対立は処理単位によるものではなかったと思われる。詳しくは衣畑(2004)を参照されたいが、そう主張する根拠は、ド(モ)は連体節の中の用例が容易に見られる一方、トモは現代語のテモより用法が狭く、凡そ仮定的な用法しか見出だせないという点にある。(29)に連体節内のド(モ)の例、(30)にトモの例を『万葉集』(8世紀)から挙げる(用例には歌番号を付す)。

(29)a. 二人行けど(二人行杼) 行き過ぎ難き秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ (106)

[二人で行っても越えにくい秋山をどうして君はひとりで越えているのだろう]

b. 妹が家道近くありせば見れど飽かぬ(見礼杼安可奴) 麻里布の浦を見せましものを

(3635)

[恋人の家が近くにあれば、見ても飽きない麻里布の浦をみせたいのに]

c. 我がここだ待てど来鳴かぬ(麻氏騰来不鳴) ほととぎすひとり聞きつつ告げぬ君かも

も

(4208)

[私がこんなに待っても来ないホトトギスを、あなたは一人で聴いて私に教えてくれないのですね]

(30) a. 千万の軍なりとも (軍奈利友) 言挙げせず取りて来ぬべき男と思ふ (972)

[相手が千万人の大軍でも、とやかく言わず討ち取ってくる男だと思っています。]

b. 左奈都良の岡に粟蒔きかなしきが駒は食ぐとも (古麻波多具等毛) 我はそともはじ (3451)

[左奈都良の岡に粟を蒔いて、恋人の馬がそれを食べたとしても私はそれをしっしつと追いはしません。]

(29a)の「二人行けど行き過ぎ難き」や(29b)の「見れど飽かぬ」等はそれぞれ「秋山」,「麻里布の浦」という名詞の属性を規定する文の付加的な部分であり、前件は独立した処理単位になっていない。古代語のトモ・ドモの対立が、仮定などの意味による対立であるとするれば、現代語のケド、テモの対立は歴史的な過程で形成されたものであり、それが処理単位によって分化しているという主張は、日本語史という広い視点から見たとき、現代語独自の特徴を捉えるのに有効な記述となっていることが分かるだろう。

4.2.4. 他の研究との関連

従来テモは、「仮定条件」「確定条件」(あるいは「恒常条件」)を表すとされてきた。このことは、テモが前件、後件が一つの処理単位であるということと矛盾しない。テモは前件後件が一つの処理単位なら、どの条件でも表すのである。一方、ケドは、「確定条件」とされてきた。しかし、次の例から分かるように、ケドの「確定」が、「条件節が事実を表す場合」(今尾 1994: p.101)や「述べられている事態が実現したことが確認できる事実的な場合」(前田 1994:p.104)のようなものでないことは明らかである。

(31) a. 雪が降るだろうけど、出かけよう。

b. (ひょっとしたら) 雪が降るかもしれないけど、出かけよう。

「確定」に対する本稿の回答は、ケドは前件、後件がそれぞれ個別に、文脈の解釈を受ける確定した情報として述べられているというものである。前件、後件が、独立した単位なら、(31)のように事実でなくても構わない。ではなぜ(32)のように「仮定条件」は表せないのか。

(32) *もし雪が降るとするけど、出かけよう。

これは、ある事態や世界を仮定するという行為が、そこで起こる出来事と不可分に結び付いているからである。よって、単にある事態が起こったと仮定してみることは、何の関連性も持たないのである。

次に藤井(2002)との関連について述べる。藤井(2002)の研究は、テモの持つ「カテゴリーの輪郭」を、主に「内部構造」(p.252)から明らかにするのに対し、本研究は、テモとケドの対立という、言わばテモを外部から見るといえる点で、相補的な関係にあると言える。しかし、藤井(2002)の提示する現象及び実例を、本稿の観点から矛盾無く説明しなければならないことは言うまでもない。本稿では、(20)のうちc, dのような「逆説性」のみが顕著な例を主に取

り上げたが、他の a や b, e ~ g も、前件と後件が一つの処理単位となっているという本稿の主張を逸脱するものではないと思われる。なぜなら、これらは C 「非条件性」という性質を持ち、前件は後件の「結論を強調し主張する」(藤井 2002:p.259, 273) ために取り立てられていると見ることができるからである。このことは、(20b)や(20e)(20f)のように、前件がほとんど実質的な内容の無い例に特に顕著で、「盆と正月が一緒にきても」「何があっても」はこれら自体が文脈仮定に対し否定や強化として機能することはなく、後件を強調するために、極端な例を取り上げているに過ぎない。

最後に、本研究が最も親和性を持つ研究に、南(1993)による従属節の統語的な分類が挙げられる。南(1993)によると、テモは B 類、ケドは C 類に分類され、B 類よりも C 類の方が、前件、後件の独立性が高いとされる。そこで、本研究の貢献を考えると、いくつかの現象の指摘とともに、このような南(1993)の分類を、言語形式の意味記述という観点から定式化し直したとすることができる。テモとケドを情報の処理単位の違いによって記述することは、「逆接」を記述する枠組みを提示し、南(1993)が B 類とするノニを知識の否定として別に論じたことで、可能になった論点である¹⁹。

5. さいごに

本稿では、人の持つ「知識」と発話解釈における「文脈」の区別、発話解釈における情報の処理単位等の理論的考察を行い、それを踏まえることで、ノニ、テモ、ケドといった「逆接」の接続助詞を適切に記述できることを示した。以上述べてきた 3 語の違いを次の表にまとめておく。

知識の否定	文脈の否定	
	前件と後件が一つの情報	前件と後件が独立した情報
ノニ	テモ	ケド

ノニは、否定されている含意が、「知識」というより特殊なものである点で他と異なっている。テモとケドは、発話解釈一般に推論として補われる「文脈」が否定されているが、情報の処理される単位によって形式が対立している。なお、「知識」の否定は、違和感・意外感、不満を感じるという人の心理的、経験的側面が概念化されたもので、今後「文脈」の否定と一つの意味的カテゴリーに括るべきかが問題となるかもしれない。より広い言語現象の観察が必要となるだろう。

本稿で論じた以外に「逆接」と言われる助詞には、知識が否定されるグループとしてのクセニやニモカワラズがある。クセニは「癖」の語彙的な意味が反映されるなど、それぞれノニよりも特殊な制約が加わっている(詳しくは衣畑 2003 参照)。一方、テモに類似した接続助詞には、カラッテやトコロデがある。カラッテは、カラという理由とッテ…ナイという否定から成り立ち文末が否定に偏るなどの制約がある。トコロデもトコロの語彙的な意味が反映されている(詳し

くは田窪・笹栗 2002)。さらに、ナガラやモノノは、前者が「同一時点」(丹羽 1998:p.115), 後者が「出来事の二面性」(詳しくは別稿で論じたい) という語彙的に特殊な意味を持っていると思われる。

これらを本稿の枠組みから捉え直すことは今後の課題であるが、本稿で取り上げたノニ、テモ、ケドは、これらに比べ、語彙的な制約が比較的少ない助詞である。本稿で理論的考察を行ったのは、人の情報処理に対する心理学的に妥当な理論がなければ、このような語彙的な意味の乏しい助詞の意味は正確に捉えることができないと考えたからである。一方、このような現象を語る言葉としての理論を持つことができる時、我々はこれらの助詞から新たな知見を獲得したといえることができるであろう。

注

- 1 ケド以外に、ガヤケドモも同じ意味と考えられるので、以下区別せず言及している。ただし、所謂「前置き」については、「逆接」と異なる用法と考え、考察の対象には入れない。またテモにもタツテというほぼ同じ意味の形態があるが本論で触れている部分はない。
- 2 本稿で取り上げるノニ、テモ、ケドの三つの形式について触れている比較的最近の論文としては、西原(1985)、今尾(1994)、中里(1997)などがある。しかし、これらも以下に触れる研究と同じ問題点を持っている。
- 3 「後件がともに」は「前件と後件がともに」ということと思われるが、ノニの前件は、反事実条件文の場合もあり、「事実」とは言えない。
- 4 ここで「知識」に「真であると考えられる情報」と「真であって欲しい情報」を認めるのは、これらだけが、命題態度によって埋め込まれずに記憶装置に格納される、基本的な情報と考えられるからである。このような考えはたとえば Sperber and Wilson(1995)第2章2節を参照。ただし以下、議論の簡略化のため、前者を中心に論じ、後者については特別な場合以外触れない。
- 5 話し手が自身の「知識」と異なる情報を使用するとは、たとえば、(3)の例において、メアリーは実は遠くに認められる建物を「城」だと知っているのだが、聞き手が理解しやすいために「教会」と言っているような場合などである。
- 6 対話における情報を話し手と聞き手の「共有知識」として考えることもできない。それは、以下で述べる理由に加え、完全な共有知識が相手の知識や相手から見た自分の知識など無限の埋め込みを必要とするからである (Clark and Marshall 1981 参照)。
- 7 話し手が聞き手の「知識」と見なすものは、同時に聞き手にとっての顕在的な情報、つまり「文脈」と見なされるものである。一方、話し手の「知識」は、「文脈」である場合もあれば、そうでない場合もある。
- 8 「君は間違っている、太陽はまだ昇っていない」は聞き手の「知識」と解釈される場合。「たしかに君が言うように太陽はまだ昇ってなかったね」は聞き手の「知識」と解釈されない場合。
- 9 ただし、これらはむしろ言語の使用に関わる問題ではある。
- 10 これは、(6a)から「ビルには恋人がいない」という推意が導出できないと主張しているわけではない。適切な文脈を補えば、そういう推意を導くことも可能だろう。しかし、それは「毎週末ニューヨークへ行っていない」という命題全体からの推意であって、「毎週末ニューヨークへ行っている」から「恋人がいる」が導出されそれが否定される、といったプロセスを経るもの

ではない。

- 11 注3で触れたように、ノニの前件には、たとえば「山田が来たら楽しくなっていたのに」のように反事実条件文が来ることがある。このような反事実条件文は、「真であると考える情報」ではもちろんなく、「真であって欲しい情報」(注4参照)であり、「山田が来たらよかったのに」のような願望表現の一種として使用されている。ノニは反事実条件文だけでなく、願望表現一般と相性が良い。
- 12 (17a)でケドが不自然なのは、ケドが連体節に入りにくいからである。これは次節での重要な論点になる。
- 13 そもそも、聞き手の「知識」への言及は複雑な計算を必要とするので、言語形式にコード化されていることは好ましくない。この点については田窪・金水(1996)参照。
- 14 ここで問題にしている「遭遇した事態に対する話し手の態度を表す用法」とは別に、テモは「そんなこと言われても。」のような意外感を表す用法を一部に持っている。ノニの意外感を表す用法は、話し手の知識を前件に述べるのに対して、「そんなこと言う」は話し手の知識ではなく、遭遇した事態そのものであり、テモの後には遭遇した事態ではなく「困る」のような評価形容詞が省略されていると思われる。このテモは、聞き手が強く関与し用法が限定されているようである。藤井(2002)の言う「テモ亜形構文」(4.2節参照)の一種であろうが、詳しい考察は別の機会に譲りたい。
- 15 モがEVEN(サエ)のような意味を持つことについては沼田(1995)が詳しい。また、そのモとテモの関係については沼田(1986)に指摘がある。
- 16 田窪・笹栗(2002)の5.5.2節にほぼ同様の指摘がある。
- 17 Carston(2002)3章, Blakemore(1987)4章等を参照。
- 18 もちろん全てのテモがケドに置き換えられないわけではない。例えば(20a)は、ケドでも置き換えられるだろう。これは、「一生懸命勉強する」という前件が、話し手の意思の表明として聞き手にとっての新情報となり、何らかの含意を生む文と解釈される可能性があるからである。ただし、どの文でも、ケドに置き換えるとニュアンスは変わる。
- 19 南(1993)の言うB類, C類の区別全てを処理単位の差と見なすこともできるかもしれない。しかし、情報の処理単位により言語形式が分化しているのは、テモとケド以外にはなさそうである。例えば、南(1993)でカラはC類とされているが、カラにはB類の用法もC類の用法もあることが田窪(1987)によって示されており、いわゆる「順接」の形式分化はこの概念からは説明できない。よって、言語形式の意味記述ということに関しては、処理単位の差がテモとケドの形式分化にとって重要であるが、他の形式をこれにより分類することにこの点で意味があるかはよく分からない。

参考文献

- 今尾ゆき子(1994)「条件表現各論—ガ/ケレド/ノニ/クセニ/テモ—談話語用論の観点から—」
『日本語学』13-1, 92-103, 明治書院
- 衣畑智秀(2001)「いわゆる「逆接」を表すノニについて—一語用論的意味の語彙化—」『待兼山論叢 文学篇』35, 19-34, 大阪大学大学院文学研究科
- 衣畑智秀(2003)「ノニ・クセニ・ニモカカワラズ」『日本語文法』3-1, 3-18, 日本語文法学会
- 衣畑智秀(2004)「古代語・現代語の「逆接」—古代語のトモ・ドモによる意味対立を中心に—」
『語文』83, 49-58, 大阪大学国語国文学会

- 坂原茂(1985)『認知科学選書2 日常言語の推論』東京大学出版会
- 田窪行則(1987)「統語構造と文脈情報」『日本語学』6-5, 37-48, 明治書院
- 田窪行則・金水敏(1996)「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3-3, 59-74, 日本認知科学会
- 田窪行則・笹栗淳子(2002)「日本語条件文と認知的マッピング」大堀壽夫編『シリーズ言語科学 3 認知言語学Ⅱカテゴリー化』135-161, 東京大学出版会
- 中里理子(1997)「逆接確定条件の接続助詞—ガ・ノニ・モノノ・テモ・ナガラについて—」『言語文化と日本語教育』13, 160-170, お茶の水女子大学日本言語文化研究室
- 西原鈴子(1985)「逆接的表現における三つのパターン」『日本語教育』56, 28-38, 日本語教育学会
- 丹羽哲也(1998)「逆接を表す接続助詞の諸相」『人文研究 大阪市立大学文学部紀要』50-10, 91-125, 大阪市立大学文学部
- 沼田善子(1986)「副詞句のとりたて—「と」「ば」「たら」「なら」と「も」」『都大論究』23, 19-32, 東京都立大学国語国文学会
- 沼田善子(1995)「現代日本語の「も」—とりたてて詞とその周辺—」つくば言語文化フォーラム編『「も」の言語学』13-76, ひつじ書房
- 藤井聖子(2002)「所謂「逆条件」のカテゴリー化をめぐって 日本語と英語の分析から」『シリーズ言語科学4 対照言語学』249-280, 東京大学出版会
- 前田直子(1994)「条件表現各論—テモ/タッテ/トコロデ/トコロガ—」『日本語学』13-8, 104-113, 明治書院
- 前田直子(1995)「ケレドモ・ガとノニとテモ—逆接を表す接続形式—」宮島達夫他編『日本語類義表現の文法(下) 連文・複文編』496-505, くろしお出版
- 南不二男(1993)『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- Blakemore, Dian (1987) *Semantic constraints on relevance*, Basil Blackwell, Oxford.
- Carston, Robyn (2002) *Thoughts and utterances: The pragmatics of explicit communication*, Blackwell Publishers.
- Clark, Herbert and Catherine Marshall (1981) 'Definite reference and mutual knowledge', *Elements of discourse understanding*. Joshi, A., Webber, B. and Sag, I. (eds), 10-63, Cambridge University Press, Cambridge.
- Fujii, Seiko Yamaguchi (1989) Concessive conditionals in Japanese: A pragmatic analysis of the S1-TEMO-S2 construction. *BLS* 15. 291-302. Berkeley California.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1995) *Relevance: Communication and cognition* second edition. Blackwell Publishers. (邦訳: 内田聖二他訳 (1999) 『関連性理論—伝達と認知—第2版』研究社)

用例出典

佐竹昭広・木下正俊・小島憲之(1998)『補訂版万葉集本文篇』塙書房

付記

本稿はThe 2nd Biannual Workshop in Japanese Discourse and Pragmatics (2003, Michigan State University)における, 'A view on Japanese concessive with special reference to *noni*, *temo* and *kedo*' と題した発表をもとに, 修正, 加筆したものである。席上や発表後にご意見下さった

方々、及び、有益な指摘を頂いた『日本語科学』の査読者の方々に御礼申し上げます。

(投稿受理日：2004年 5 月21日)

(改稿受理日：2005年 1 月20日)

衣畑 智秀 (きぬはた ともひで)

大阪大学大学院文学研究科博士後期課程

kinut76@yahoo.co.jp

On Japanese concessives: Information types and units of processing

KINUHATA Tomohide
Graduate Student, Osaka University

Keywords

concessives, knowledge, context, processing unit

Abstract

The meanings of Japanese concessives such as *noni*, *kedo* and *temo* have not been fully explicated due to the insufficient consideration of the theoretical framework to describe their meaning oppositions. In this paper, I consider the speaker's knowledge and the information processing in verbal communication from the viewpoint of Relevance Theory and attempt to describe their meanings more appropriately.

Using the analysis based on this theory, we can divide the 'implications' conveyed by concessive sentences into two types of information, namely 'context' and 'knowledge'. The former is manifest information for the hearer in verbal communication but the latter is what individuals hold as true in their daily life and is not directly relevant to the communication at hand.

Noni is used to express the denial of the speaker's 'knowledge'. The distinctiveness of sentences with *noni* (for example, the factive status of the main clause, the sense of incongruity, etc.) is explained in terms of the uniqueness of the denied implication.

On the other hand, *kedo* and *temo* are used to express the denial of 'context'. Used generally for utterance interpretations, 'context' brings no constraints on these particles' meanings. *Kedo* and *temo* are used complementarily; the antecedent and the consequent of the former are processed in contexts as independent pieces of information, the latter as a whole.